

連載執筆者の佛原行夫さんが亡くなりました



↑上の写真は1990年11月号に載せた「アニマル讃デー」という記事で、田んぼを前にゴキブリのコスプレをしている佛原さん。いかにも似合っていました。

もうだいぶ前のことですが、本誌1991年2月号(No.40)からスタートし、2000年11/12月号(No.103:20世紀最後の号)までの間、「もういくつねると世紀末」のタイトルで連載エッセイを書いてくれていた佛原さんが先日亡くなられたそうです。

連載を書いていた頃は大阪に住み(枚方のジュリーと呼ばれていたとか)、いかにも大阪人のノリが面白かったんですが、連載終了後しばらくして南の島の宮古島に移り住み、ヨガの先生をしたりインドに旅をしたりと好きなことをして暮らしていたそうで、最期も宮古島で迎えたそうです。伝え聞くところでは胃がんと患い、手術で胃の4分の3と十二指腸を切除、そのあとも元気にされていたようですが、昨年12月に胃がんの転移があり、今年の3月26日に亡くなられたとのこと。さいごは自宅で療養され、亡くなる前日までお話をされていたそうです。

彼に連載エッセイを頼んだきっかけは元々動物関係でこの左のページに久々登場してもらったなかのまきこさんの紹介で知ったと思うのですが、今回、佛原さんが亡くなったことも彼女から教えてもらいました。佛原さんの一見常識とかけ離れたような

物言いは、よく考えるとずばり物事の真髄に深く切り込んでくるパワーを持っていて、僕ら自身の中にある体面や大義名分、偽善を暴露してしまう鋭さと、同時にそれを笑い飛ばしてみせる大らかさを持っていました。そんな器の広さはなかなか真似をしようと思ってもできないものです。とても懐かしく惜しい人を亡くしたと思いますが、でも好きなように生き、そして死んだ彼は生き方のお手本も示してくれたような気がします。今頃きつとあの世でも冗談を飛ばしてるんだろうな。

バックナンバー再録

バックナンバーの中から面白かった記事や今も重要な意味を持つと思う記事を再録して載せようという話が以前からありましたが、その第一弾として佛原さんの連載第一回のエッセイを下に載せます。どうぞ彼のエッセンスを味わって下さい。なおタイトル文字やイラストは八丈島で近所に住んでいた山ちゃんが担当してくれました。佛原さんの文章にぴったりのイラストをずっと描いてくれてどうもありがとう!

もういくつ

ねると

世紀末

佛原行夫

いっぽろ七を考へる

「あなたはプロレスに興味がありますか?」

お見合いや商談の席は元より、フツウの世間話のネタにするにも、かなり躊躇するのが上記の質問である。これが同じプロレスポーツの業界でも、プロ野球や相撲の話なら大手を振って世間話として通用するし、ボクシングにしても、世界タイトルマッチの話なら充分どころかお釣りがくる。

が、プロレスになるとそうはいかない。相手の服装、言動、性格を前もってチェックしておき、この人ならいけるという確信を持ってからでないで、プロレスの話は切り出せない。何故なら世間には、「プロレスとは、うさん臭いものである」という常識と、「うさん臭いことに興味を持つ人間は、それともうさん臭い奴である」という認識が存在しているからである。

「プロレスはうさん臭い」説の根拠になっているのは、

- 勝敗について事前に打ち合わせ済みらしい。
- 相手の技をわざと受けている。
- レフェリーがいい加減である。反則に関するルールがあいまい。
- お面をかぶったり、ペイントしたりして不真面目である。

ざっとこのようなものである。私にはこれらの事を指摘して、プロレスを批判する人の人物像がおぼろげではあるが捕める。基本的におふざけやチャランポランが嫌いなマジメな人間で、正義とか前進とかの言葉が好きで、勝ち負けにこだわる性格の持ち主だと思う。

別にプロレスが好きかどうかは趣味の問題だからどうでもいい。ただ「うさん臭いからプロレスはダメだ」と断定する人のウサンクササが気になって仕方がないのだ。ええやないか、わざと負けてやる強いレス

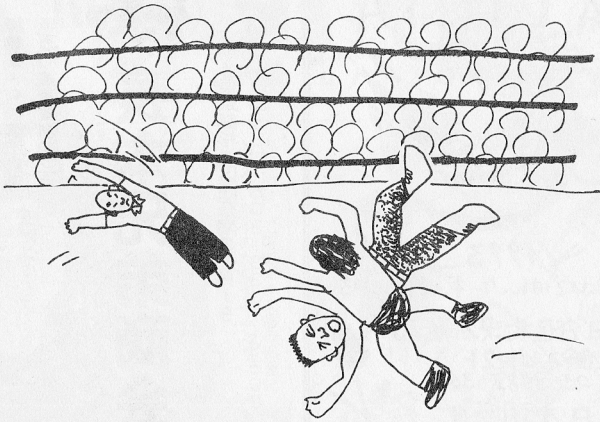
ラーや、弱いくせに勝たせてもらうレスラーがおつて

強い者が必ず勝つ世界よりも、強いからといって勝つとは限らない世界の方が奥が深い。

同様に、相手の技を受けたり、ロープに飛ばされたら、ちゃんと反動をつけて戻ってきてやるのが、「思いやり」というものではないか。相手の立ち場も考え、見せ場も作ってやらにやどうする。それがオトナというものではないか。さらに反則やお面、ペイントに関しては、アバウトさが持つ遊び心を楽しめば良いのだ。

考えてみれば、政治も宗教も文化も、さらには学校も組合も市民運動も、みんなどこかうさん臭い。プロレスの持つうさん臭さに目くらまを立てる人は、きつと自分自身はうさん臭くない世界の住人であると思っているのだろう。だが、その思い込みはうさん臭いを通りこして、危険だ。「正義の味方」の登場である。「正義の味方」ほど恥知らずで罪つくりな存在はない。それに比べれば、「プロレスの味方」なんぞカワイイものだ。

恥を知り、照れを知る、そんなオトナが「人生やのう」と思いながら観戦を楽しむ「スポーツ芸能」という特殊なジャンル、それがプロレスなのであります。(ぶつはら ゆきお)



ロゴ・イラスト：山本憲之